Introduction

三上　鯛

『植物は延々と……眠り続ける。植物、動物、人と進化してきた我々が、眠りを……軽蔑し、駆逐するのは当然のことであり……』

壁越しでも電子公告の音声が聞こえる。スピーカーは通りの角に設置されたまま、耐用年数をとっくに過ぎ、音の輪郭を曖昧にさせていた。だが政府はこれを直そうとはしない。既に公告が意味を為さない程度に、我々の生活から睡眠は遠ざかった。

人々が眠らなくなってから、どれだけ経っただろうか。

曇った窓から昼の光が見えた。店内が薄暗い分、外が酷く強い光で満たされているように見えた。

脳内のチップが軋む音が聞こえた気がした。

「青井！　クスリが足りねぇぞ。さっさと打て！」

合皮の一人用ソファで客が喚いた。私の名前は青井ではなく、青村だ。既に客の脳は朧げになり夢と現の狭間を漂っている。私は手元の端末で送信信号の出力を少し上げた。男の身体が大きく震え、そのままソファに沈み込む。譫言のような呻きが口から漏れた。部屋には唾液の匂いと、汗に溶けた薬品臭が漂い始める。

軍人だというのになんて情けない。最近はこの都市外との抗争が絶えず起こっているらしく、彼もストレスフルな生活のだろうか。

客が尿を漏らし始めた。湿った雑巾を何日も放置したような匂いが鼻を突く。この街の人は睡眠のような筋弛緩状態に慣れていない。体が無意識のまま体液を分泌し、周囲に染み出していく。顔を顰めながら、掃除ロボの充電がなされていることを確認した。

四年前から始めた『睡眠屋』はそこそこ上手くいっていた。この街の住民は眠りを野蛮だと軽蔑しながらも、本能では求めていた。脳内チップを抑制する違法ドラッグは飛ぶように売れた。まさかこうやって前職を生かせるとは。

疑似睡眠に耽る客の奥で、澄んだドアベルが鳴った。確か今日は予約客がもう一人いたはずだ。時計を確認すると、予定時刻を二十分も過ぎている。文句の一つも言うか、割高料金を請求するか悩みつつ、ドアを開いた。外の空気が部屋へと流れ込む。酸素よりも気怠さの方が多い都市の空気だ。ため息が出るのも仕方ない。

白い陽光に照らされて、ひとりの男が立っていた。

「いらっしゃいませ。予約時間が」

「エイドロン都市圏ラザルス地区統制局の白井ノマエ警部です。ご同行いただけますか？」

淡々とした口調だった。男は、深い紺色の制服に身を包み、左手で警察証を開いて見せた。肩には局のエンブレム。重い視線が、こちらを貫いている

瞬間、背を向け、奥に走り向かう。机の角が太ももに

ぶつかり、鈍痛を呼ぶ。しかし、それには構っていられない。違法ドラッグ。それだけで十分にお縄だ。相手は統制局。聴取という名の拷問をする連中だ。捕まってなるものか。

背後で鈍い衝撃音。風が一瞬、頭皮を逆撫でした。次の瞬間、うなじに雷のような痛みが走る。視界が揺れ、床が傾いた。喉から潰れたような呻き声が漏れ、何が起きたか理解する前に、後ろへ引きずられていた。

背中に冷たい床の感触。肩が擦れる。足をバタつかせたが、喉に食い込む力が強まるばかり。そうやってやっと自分が襟首を捕まえられ、警官に引きずられていることが分かった。机や椅子に捕まろうにも、その暇すら与えられない。首が閉まって呼吸がし難い。

「おい！　助けろよ！」

疑似睡眠に落ちる客に叫んだ。客は私など全く意に介さない。警官も私のみを引きずり扉へ向かう。クソ、信号を強めたのが仇になったか。

警官は動きを止めることなく、気が付くと扉を出て、軽々と車に押し込められていた。男一人が男一人に負けるのは甚だ不快だ。しかし、私が彼に勝とうなどとするのは全く無理だった。諦めて座席の上で虫のように身動ぎをするに留めた。

車は護送車ではなく一般車のようだった。自動運転車なのでいわゆる運転席はなく、シートが壁に沿って長椅子のように配置されている、その片側に私は無造作に投げられた。

喉に変に力が加わったせいで、妙な咳が出る。呻く私を横目に悠然と座る警官は、タブレットを操作するだけでこちらを見向きもしない。それがやけに気に食わない。

「お、おまえ、こんなこと……」

喉の奥から絞り出した怒声は、あまりにかすれていて、誰の耳にも届かなかったように思えた。が、警官の瞳が、鋭くこちらを射抜いた。瞬間、全身が硬直する。

元は学者の私は荒事にはめっぽう弱い。それだけで黙ってしまった。そっと身を起こし、腰を落ち着ける。しばらくは警官を、まじまじと見つめるしかなかった。

彼は若かった。目元に幼さすら感じられるほどで、年齢は二十四か、五といったところか。だが、その若さに似つかわしくない威圧感があふれ出ていた。車の中は私と警官の二人だということも相まって空間が歪んだように重い。

時折、自動運転の右左折を知らせる音声が鳴るだけで、大半の時間、車の中を静寂が占めた。

二十分ほどして、警官は重い口を開いた。

「青村ヒロ、現在三十六歳。前職は睡眠研究機構、旧SOMUX の主任研究員。十年前にチームの解散と共に解任。現在は脳神経学者の知見を活かし、違法の電子ドラッグ

による『疑似睡眠屋』を生業としている。ここまであっているか？」
　警官は相変わらず私を見ない。指先でタブレットを操りながら、まるで職務規定を読み上げるような口調で言葉を続けた。こちらが逃げないとでも思っているのだろうか。否定はできないのだが。
「あ、あぁ」
「お前、電子ドラッグを使って何をしていた」
　聞かなくて良いようなことを、なぜこの警官が聞いてくるのか分からなかった。日銭を稼いで口に糊をするために決まっている。
「お金を、稼いでいました」
　気づけば敬語になっていた。警官は私より十以上年下に見えるのに、言葉が勝手に従っていた。
「他には」
「他？」
　警官は悠然と頷いた。
「例えば、そうだな。睡眠実験を市井の民を使ってやっていた、とか」
　激しく首を振る。私はただドラックを頭にぶち込んでいただけだ。それ以外、他意はない。そこらのハイになるクスリと何ら変わりない。自分の知識を生かせるのは確かに快感だが、それはそれである。そもそも私個人が持つ程度の器具では実験に足るほどの精度を出せない。やるだけ無駄というものだ。
　それを説明しても警官はずっと眉根に皺を寄せていた。
「最近、客が減ったと思わないか」
　そう聞かれて頭の中の顧客リストをぱらぱらと捲る。そういえば最近客が少ないような気がしなくもない。まさか、客から情報が漏れたのだろうか。糞尿を垂れ流すだけのクズ共のせいで、お縄にかかるなど不快極まりない。
「お前が思い浮かべている奴らはおそらく死んでいる」
「殺したのではなく……？」
　警官は心外という顔をして、ハァと溜息を吐いた。
「最近、夢を見ながら死ぬという噂を聞いたことは」
「そんなもの、この街では誰も見ないでしょう？」
　言葉を返しながら、嘲笑が漏れた。まさか、彼が冗談を言うとは思えない。公権力の頂点に君臨する統制局警が一番よく分かっているはずだ。
　エイドロンと呼ばれるこの都市は、出生もしくは入都の際に脳内にチップを埋め込むことが義務だ。これは神経系に作用し人間を強制的に覚醒させることが出来る。眠気は完全に消え、時間を無駄にせず済むという極めて『効率的』かつ『人道的』な対処である。
　そしてこの悪夢のような措置を実行したのは、何を隠そう、目の前にいる統制局なのである。科学的反論を完全に無視し、詭弁を弄して、人から睡眠を奪った。年中、

労働力不足の街は眠らないことを歓迎して受け入れた。
　無性に統制局に目の前の警官に苛立った。が、目の前の彼が悪いわけではない。この街全員の責任だ。
「貴方は最後まで睡眠論を主張した一人と聞いた」
　昔のことを言われて焦る。しかし、直ぐに諦念を込めて首を振った。
「それは昔の話ですよ。私もこうしてチップで覚醒している一人です」
　頭を指で叩いて見せた。自虐的な笑みが浮かぶ。警官は軽く頷いて、タブレットから手を離した。
「確認したところ、答えに相違はないようだ。そこで、取引を持ち掛けたい」
　顎を引いて先を促した。既に車には三十分は乗っている。統制局本部に連行するならばあまりに長すぎる。ドラックの罪を軽くしてくれれば良いのだが。
「協力してくれればドラッグについては見なかったことにしてもいい」
「はぁ」
　私の気の抜けた返事に警官は目を細めた。
「従わないなら。よくて記憶消去、最悪人格消去だ。チップに影響する電子ドラッグの使用は、かなり厳しく罰せられる」
「私は、何をすれば」
　気が付けば上半身を乗り出した。記憶、人格を消すなんて殺人と等しいことを平気でやってのけるのが統制局だ。逃げる云々ではない。ここは従わないと殺される。
　顔が強張るのを感じた。警官は薄ら笑いを浮かべて、背もたれに体を預けた。
『『無覚醒症候群』について、調べてほしいんだ」

　車に揺られながら、警官から詳細を話された。彼の口から語られたのは、ある種の奇病の話だった。最近になって、突如として眠る者たちが現れ始めたという。発症者は初めの内は電子ドラッグの常用者ばかりだったが、徐々にそれ以外の人々にも広がっている――そんな話だった当局は感知しているが、罹患者数も少ないこの病に対して、具体的に対処する気はまだないらしい。
「寝る、なんて非民的行動、当局は真っ先に擦り潰す事案ではないんですか」
　皮肉混じりにそう尋ねると、警官は小さく首を横に振った。その動きは妙に静かで、湿った夜のような重さがあった。
「だからこそ。住民は病人を外に出さないし、こちらも誰かが寝るという事実は人々に流布したくない。人々の自己検閲が機能する間に原因究明を終わらせたい」
　彼の声は冷ややかだった。なるほど、統制局らしい秘密主義な対応だ。
「もう少し、罹患者のデータを見せて頂きたいですね。

入眠時や死亡時の様子、死体、できれば、チップログ」
　チップログというのは殆ど冗談だった。死体の開頭許可をもらえれば御の字だ。だが彼は、驚くほどあっさりと頷いた。
「今、向かってるのはそれが死因になった者の家だ。チップログもここに」
　驚いた。チップログは統制局の第二秘匿情報に指定されている。一般人は希望しても見られない。チップログは脳波、行動記録、思考傾向……個人の全記録だ。誰かの全てを丸裸にするものでもある。
「いいのですか？　チップログは個人情報の塊ですよ。見ようと思えば行動記録、思想ログまで分かる」
「……私も追い詰められてるということだ。もちろん、外に漏らしたら、殺す」
　警官の強い怒りを湛えた瞳を見てられなくて、目を逸らす。警官から渡されたタブレットには、罹患者の脳波の波形が映されていた。ふと、昔のことを思い出した。研究者をしていたころはよく、これを見ていた。
　波のように規則をもって揺れる脳波はある時間をもって、その律動を失った。てんかん患者のように激しく揺れ、記録は唐突に途絶えた。
「ここで死んだってことですか？」
　歪んだ波形の始まりを指すと、警官は首を振った。
「いや、生きていた。その時間はチップが壊れた時間だ」
　チップが壊れた？　チップは都市の核心とも言える存在である。統制局がプライドを持って作り出したチップだぞ。壊れることは絶対にありえない。私が首を傾げたのを見てか、警官は説明を続ける。
「チップが壊れたとしか言いようがない。脳波が送られてこなくなってから二十分ほどは生きていた。そのあと目を見開いて死んだ」
「死んだ瞬間を見ていたんですか」
　私が尋ねると、警官はしばらく沈黙したまま、窓の外に視線を投げた。口を閉ざしたまま、彼は何も言わなかった。

　車は徐々に減速し、止まった。
「降りるぞ」
　警官は車のドアを開け先に降りた。警官は二、三歩車から離れた。今、車から降りて走れば逃げられるかもしれない。道は右に伸びている……そう思った瞬間、彼がこちらを振り返った。あの視線に、脚が縫いつけられたように動かなかった。
　仕方なく警官の後を付いていくことにした。
　しかし、無覚醒症候群という謎に対して心が浮ついて仕方がない。結局、私は心からの学者なのだ。
　警官は目の前にそびえる建物の中に入る。かなり高い。
「これは、マンションですか？」

警官は黙って頷く。高そうだ。家賃はどのくらいだろう。私の十倍は下らないだろう。
私がエレベーターに乗り込んだことを確認して、警官は最上階のボタンを押した。微かな駆動音を鳴らして、エレベーターは上昇した。
「家賃はどれくらいなんでしょう」
警官はフッと初めて笑った。
チン、とベルの音がして開いた扉の先には、目の前には黒い両開きのドアがあった。
もしかして最上階のワンフロアが一部屋になっているのか。警官はドアノブに触れ、鍵を開けた。
「先ほどの質問だがひと月、そうだな、君の月収の二十倍だろう。統制局は金払いだけはいいんだ」
警官は空笑いをした。

靴を脱ぎ警官に促されるまま、奥へと向かう。廊下が長く伸び、端に少なくない数の扉が並んでいた。いくつか通りすぎた後、一つの前で警官は立ち止った。
「ここだ」
おもむろに警官は扉を開けた。警官の肩越しに部屋の中を覗く。無機質な部屋の中央に小さなベッドがあった。脇に一脚の椅子があるのみで、他に物がない。ベッドに誰かが横たわっているのが分かった。あれが罹患者だろうか。睡眠業でよく見る譫言を吐く人々とは打って変わって、水底のように重い沈黙が罹患者の周囲を漂っている。
警官は部屋の中に入りベッド脇に立った。後に続いて警官の横に立つ。警官は眠りにつく彼女の頬を撫で紹介した。
「彼女だ。白井ユキ。十五歳。私の妹だ」
ハッと息を呑んだ。警官は彫像のように無表情にベッドに横たわる彼女を眺めている。そうか、だから彼は罹患者の死亡時の様子を知っていたのか。
「妹……」
私が言葉に迷っていると、警官が間を埋めるように話し始める。
「死んだのは昨日の十七時頃。今から二十時間ほど前だ。ユキ、いや、妹の死体が腐らないように防腐処置はしてあるから、死んだ当時のままだと思う。
入眠時は何の前触れもなく、いきなり倒れた。寝始めてから六時間ほど経ってから、突然目が覚めた。『光が見えた。脳が弾けた』と言った。そのあとすぐに痙攣を起こし……ちょうど脳波が荒ぶった時間だ。意識を失い、それで、二十分後に死んだ」
警官は吐き捨てるように言った。
「ドラッグの経歴は……」
「あるわけないだろ」
言い終わる前に警官が睨んできた。表情からは激情が

沸々と見え隠れしている。
「開頭は、してもいいのですか？」
「……あぁ」
シャツのボタンを緩め、警官は答えた。茫然と椅子に座り、天井を仰ぎ見ていた。
親族のいない私には彼がどのような感情なのかわからない。
死体に歩み寄り、頬に触れた。指先から死体へ体温が奪われていく。人間なら持っているはずの体温が伝わってこない。しかし肉体は柔らかさを保っており、ふっと目を覚ましてもおかしくはなかった。顎を掴み、首を動かしてみると、抵抗なく動いた。死後硬直はまだ始まっていないらしい。十三時間前に死んだにしては、新鮮な死体だ。統制局の防腐処理はそれなりの質を持っている。
「医療用メスはあったりしますか？」
警官はどこからかバッグを持ってきた。開けてみると、中には医療器具と検査器具一式が入っていた。
「はは、準備がいい」
私が笑うと、警官はより一層私を睨みつけた。
「早くしろ」
話したくないと言わんばかりに、舌打ちをされた。しかし、そんな些末なことは私の頭をすり抜ける。久しぶりに脳を見られることに興奮していた。
「血塗れになりますが、ここで開けていいんですか？」
「いい。ここの物は全て使い捨てだ」
そう呟くと背を向けて部屋を出て行った。ならば遠慮なく、と私はメスを手に取る。
深く息を吸って吐いた。
研究所を追われてから、直接脳を扱う機会なんて訪れなかった。ゴム手袋をはめ、軽く指を鳴らす。
メスの刃を、頭皮に沿わせる。抵抗なく皮膚が割れ、赤色が覗く。血は吹き出すことなく、だらだらと鈍く流れる。同時に錆の匂いが鼻腔を掠めた。両手を切り口に差し込み、頭皮を開く。露出した頭蓋骨は、薄い黄みがかり、彼女が生命を停止させてから幾分か時間がたっていることを示す。それを電動ノコギリで切断する。僅かな粉塵が視界を覆う。チップのある部位に気を配りながらの作業は苦ではないが疲れる。
カツン、という小さな音とともに、骨片が持ち上がる。骨を捲ると脳が現れた。死体ではありえないような鮮やかな桃色をしている。思わず息を呑む。手が震えたのは、恐怖のせいじゃない。久々に触れる、生そのものだった塊への興奮だった。
チップは、右前頭葉近くに挿入されていた。睡眠を制御するにはちょうどいい部位だ。だがその外観は、見るも無残だった。コアは黒く焦げ、周囲の脳組織も灼けたように変性している。そして何よりチップから触手のようなものが右脳全体に広がっていた。まるで、脳を支配

するような。
「どうだ」
背後から警官の声が飛ぶ。出て行ったと思ったが、いつの間にか帰ってきたみたいだ。
「まだ何も……。普通の故障じゃないのは確かです」
私はメスを置き、そっと死者の顔を見る。幸せな夢を見ているようだ。死の直前に何を見たのだろうか。彼女はどんな光を見たのだろうか。
血管束を避けながら、チップ周囲の組織を慎重に剥離した。滲む脊髄液が手袋を纏う。シリンジでサンプルを採取し、スキャナーに接続する。
警官は私の動作を黙って見ていた。興味よりも、結果を急かす焦燥が勝っているようだった。
「生体データの復元を試みます。完全な復元は期待できませんが」
私は宣言し、スキャナーを起動した。低い駆動音が鳴り、解析を始めた。
スキャナーでは脳組織内に残存する電子残響――いわゆるエコー情報を読み取る。つまりは、脳組織の痕跡からその時、脳で何が起こったかが分かる。チップ自体の損傷が激しい以上、再生されるデータは断片的だろうと思った。
スキャナーのディスプレイが、淡い青白い光を帯びる。画面には明確な映像が現れる。
通常、脳断片から残響は静的なホワイトノイズとして現れる。しかし、目の前の画面には意味のある映像があった。
脳の内部から還元された映像。それは部屋だった。無数のコードと、点滅する大量のランプ。壁面いっぱいに並ぶ、黒い四角い箱たち。おそらくはサーバー。
背筋に微かな戦慄が走る。
「なんなんだ……」
警官の問いに、短く首を振った。
「分からない、です。あえて言うならば、死ぬ直前まで鮮烈な夢を見てた、としか」
それらしい答えをしてみせたが、納得はしていなかった。なぜ、死者の脳細胞に、こんな鮮明な記録が存在する？　脳全体の細胞を見るのならばともかく、ほんの少しの脳断片にはそれほど多くの情報が詰まっているわけではない。
ならば、脳に灼きつくほどに強い信号が送られたのか。
画面の中で、何かが動いた。
気づけば、モニターの隅で、誰かがこちらを見ていた。顔は、判別できない。ぼやけたノイズが覆っている。しかしその存在だけは、異様な質感をもって脳裏に焼き付いた。
おぞましい。
そう思った瞬間、画面の誰かはこちらに手を伸ばした。

顔に指が触れる。眼球の隙間から脳に、指が入る。ぐちゅりと嫌な音がする。目から血が溢れる。頬を伝って血が流れ落ちる。脳に入られた。頭蓋の中で指が動いた。
あ、死ぬ。

警官が、スキャナーから電源コードを抜いた。バツンと音がして、映像が途絶えた。止まっていた呼吸が、始まった。互いの荒い呼吸音だけが聞こえる。恐ろしい。恐ろしい。死んでしまうところだった。殺される。怖い、怖い！
警官が私の肩を掴む。
「だから、何だよ、これは！」
怒号にも似た警官の詰問に荒い息しか返せない。恐ろしい。こんなものを死ぬ間際まで見せられたのか。これは何だ、統制局は何を企んでいる。脳を擦り潰したいのか！
肩の手がより強く私を掴んだ。それが私に今、生きているという実感をもたらした。ゆっくり深呼吸をして、呼吸を落ち着ける。心を冷やして冷静さを取り繕う。
「……この死体は、ただ死んだのではないと思います」
「どういうことだ」
警官の声に、私は無機質に応えた。
「ずっと、あの夢を、見ていた、死ぬ直前まで」
警官は私に怪訝な顔を向けた。
「夢を見ていた」
私の言葉をオウムのように繰り返す。
「今、スキャンしたのは脳組織の電子残響、細胞に残る記憶です。細胞一つに残る記憶程度では、この画面には、はっきりとした映像は映らず、フラッシュのような光のみが映ります。そこからチップからどんな信号が送られていたかを読み取ろうとしたのですが……」
続きの言葉を探す。細胞数個に残るほどの強い信号。これがなぜ送られてきたのか。
「このように、明確な映像となっているのは、見たことがありません」
「それで」
警官の焦燥に駆られた表情が目に入った。
「ここからは仮説なのですが、おそらくチップから強力で明確な映像信号が送られたのだと思います。あまりに強い強度の信号だったので、脳は灼き切れた。それが、妹さんが言う『光が見えた。脳が弾けた』ということなのだと思います。そして痙攣、脳死、死亡という過程を巡ったのではないかと」
「脳が灼き切れた……ユキの脳は灼き切れた」
警官は茫然と私の言葉を反芻した。甚だ信じられない、と声音が語っている。
説明するよりも見せた方が早いだろう。開頭部からにじみ出る血液を吸い取りながら警官に問う。

「脳を、見ますか？」
警官は唇を噛んで頷いた。彼を誘導し、開頭部から少しだけ露出した脳を見せる。警官は小さな呻き声を上げる。血は酸化が進み少し黒ずんでいる。脳を包む骨と脳の間に手を差し込み開いて、開頭部を大きくした。粘性を持った体液が手に絡みつく。しばらく脳を開けたままにしたから、体液の粘度が上がっていた。ニチャと嫌な音が耳に響く。チップ全体を一目で確認できるまで、脳を開く。右脳の大半を開くことになってしまった。皮と骨を捲られ、脳を外気にさらす姿は人体模型のようだ。
警官はわずかにえずくだけで耐えてみせた。
「チップは本来、指先に乗る程度の小さなものです。しかし、この方のチップは自身を核にして触手のように右脳全体を包んでいます」
「チップが、成長。そんな機能はない」
「そうです。しかし実際に、チップは触手を伸ばして成長している。色を見る限りは、脳組織の一部を流用し、触手を生やしている。まるで、脳をチップが支配するような……」
警官が頭を振った。
「チップには、単純に人間を覚醒させる機能だけだ」
私はその言葉に首肯する。チップは主には脳を覚醒させる機能しかない。
「しかし、統制局の思考誘導、犯罪者の記憶読み取り、医療現場での脳波測定にも使われますよね。すなわち、ある程度、脳の操作権を持っている」
「いや、それはそうだが……」
頭を全力で回転させ、仮説を組み立てる。
「チップが何らかの理由で暴走し、自己増殖プログラムが流れ込んだ。先ほどのエコー映像を見る限り、外部の人間が増殖プログラムを統制局の思考誘導プログラムに乗せて送り込んだのでしょう。増殖プログラムに勝つことが出来ず、暴走し脳が灼き切れた、のではないでしょうか。
あぁ、そういえば私の客から死んだのですね。チップに電子ドラッグを流し込んだり、強いストレスに晒されていたりしたチップから暴走するのではないでしょうか。
つまり、無覚醒症候群は病ではなく、人為的に起こさせられた、というのが私の見立てです」
警察は眉間の皺を深めた。
「ありていに言えば、脳の乗っ取りによって、彼女は死んだ」
「……なるほど」
警官は理解を示してはいたが、納得はしていないようだった。それは私も同じで、口から出たが全く確信を持てていなかった。
「まだ、分析が必要です。脳のサンプルとデータを持ち帰ってもいいですか」

警官はゆっくり首を振る。
「駄目だ。君は今からこの家に軟禁させてもらう」
「なんっ」
「既にチップログと無覚醒症候群の患者を目にした。つまり『一般人』ではなくなった。統制局管理下に入らないなら、そうだな、記憶消去が妥当だろうか」
顎に手を当てたと思えば、挑戦的にこちらを見てきた。都合の悪いことは除去する、統制局らしい。
私が眉根を寄せていると、警官は言葉を続けた。
「君の生活の一切は保証する。必要なものは随時、搬入する。この病を調査しろ」
生活の心配ではなく、統制局の動きが気に食わなかったのだが。しかし、私には選択肢はない。ここで彼の妹の死因究明に尽力するか、死ぬかの二択だ。
「……分かりました。欲しいものは警官さん、あなたに言えばいいですか？」
警官はピクリと唇の端を震わせた。
「私の名前は白井だ」
「……白井さん、に言えばいいですか」
白井は黙って頷いた。

軟禁生活が始まって二週間。白井との生活は思ったよりも快適だった。三食の飯と潤沢な研究資金。睡眠屋の劣悪な環境とは大違いだった。激しく扉を叩く音も客からの怒号も聞こえない。広い一室で死体と唸る分析装置と向き合うだけだった。
夕食を示すアラームが鳴る。いつの間にか夜になったようだ。窓のないこの家では時間感覚が狂う。分析も一区切りがついた。大きく伸びをして席を立つ。
ダイニング・テーブルに着くと、皿からおいしそうな香りが漂った。今日は合成肉のステーキらしい。
食事は白井と共に摂ることが多かった。白井は食事中もタブレットを見て私に意識を向けることはなかった。何の仕事をしているのかは、何一つ言わなかった。しかし白井はおそらく一日中家の中にいた。手洗いなどで彼の姿を見るたびに、隣室かリビングに座りパソコンを叩いていた。彼も私と同じく、彼なりの仕事をしているのだろう。
無表情に肉を食む白井を見て、溜息を吐いた。統制局には関わるなと脳裏に刷り込まれた言葉を反芻する。白井の仕事に興味を持てば、拷問だけでは済まされない。よくて記憶消去、最悪人間消去だ。
人間消去は周り含めて世界の全てから存在の痕跡を消す。私の周りにも人間消去を受けた人がいるかもしれない。私は覚えていないが。
おそらく、昔の同僚の何人かは人間消去を受けている。なぜなら、元職場の人間が少なすぎるからだ。今までに五人ほどしか知らない。それも全員若手だ。三十五以上

の人間は一人もいない。邪魔になって消したのだと容易に想像できる。
私も、同じように。
嫌な想像をしてしまい、慌ててステーキを口に放りこんだ。
「おい」
目の前に座る白井が憮然と声をかけてきた。彼は敬語どころか私の名前を呼ぼうとすらしない。
「なんですか」
「二週間経つが、分析はどうなんだ」
私は逡巡した。おおよその犯人の目星はついた。しかし、これを統制局サイドの彼に言ってもいいのだろうか。
彼は私に協力してくれてはいるが、味方ではない。騙されてはいけない。
「いや、まだ……」
「そうか」
白井は静かに口に肉を運んだ。悔しそうに見えた。私から情報をとれなかったことがプライドを傷つけてしまったのだろうか。
「そういえば、お前に言っておきたいことがある」
白井がタブレットを渡してきた。通信機器に触れるのは久しぶりだった。私が直ぐに外部に連絡しない、くらいの信頼は得られたのだろうか。それとも、目の前でそんな豪胆なことはしないと思われるほど舐められているのだろうか。
白井から受け取ったタブレットの画面を見ると、『統制局研究部日報』と題された文章が映されていた。
「これは……？」
白井は、短く息を吐き出して私を見た。
「お前の『脳の乗っ取り』仮説を聞いて、統制局研究部の情報をとってきたんだ。奴らは全住民の脳を掌握するために、チップに自己増殖プログラムを送っている」
ヒュッと音がした。それは私の喉から出た音らしい。手の中のタブレットが重く感じた。
言葉が出てこない。白井の真意が見えない。なぜ、ここまでするのか分からない。何のメリットがあるだろうか。情報の共有なんてしなくても、私から吸い取ればいいじゃないか。それが統制局のやり方だろう。
「これじゃ、足りないか」
白井は懇願するようにこちらを見た。
「私はまだ君の味方にはなれていないか」
目の前の青年はいつもよりやけに若く見えた。
まるで私を気遣っているような態度に私は苛立った。彼をどう扱うべきなのか分からない。何を求めているのか、私はどうすべきなのか分からない。
「……妹は私の唯一の肉親だったんだ」
白井は唐突に語り出す。同情を誘う作戦だろうか。フォークを合成肉に突き刺した。随分と冷えてしまったよ

うで、硬くなっている。
「私は元々貧しい家の出だった。両親は報奨金目当てに無睡眠実験の治験に応募した」
無意識に口内の肉を噛み締めた。私が主任研究員になる前の話だろう。協力金ではなく報奨金という名がつく治験。死にやすいから、報奨金が出るのであっておそらくは。
「あっけなく、二人とも死んだ。手に入った莫大な報奨金で脳と体に金をかけ、私は統制局警になった。妹を養うために」
しかし、理由だった妹が死んだわけか。白井は自棄になって私に情報を流したのか。それなら合点がいく。
「両親と妹を奪った統制局を、私はぶっ潰したい」
「統制局？　なぜそれを恨むんですか？」
私の言葉に白井は眉をしかめた。この顔は意味が分からないという顔だ。怒っているわけではない。共同生活で少し、彼の表情を読み取れるようになった。
「だって報奨金も貰えて給料も貰えた。人はいつか死ぬ。死は無意味、無価値です」
私が笑うと、白井が動いた。瞬間、背後で何かが刺さったような鈍い音がする。右耳を何かが掠めたらしい。熱を持ち始めた。
白井がフォークを私に投げたようだ。そうと分かるのに時間がかかった。
「ユキは殺された」
一層低い声に、私は固まる。
白井は舌打ちをし、音を立てて椅子に座り直した。テーブルの上はステーキと野菜とパンが散乱し、もう食事を続けられそうにない。
「分かってるんだ。青村、お前は過去に適切な人間関係を築けない。お前に家族の話をした私が悪かった」
白井は自分に言い聞かせた。ハッと私を鼻で笑った。
「いいんだ、お前に理解を求めた私が悪かった」
白井は食器と残飯をテーブルクロスで包み、雑に掃除ロボへ突っ込んだ。彼は足早にダイニングを出て、私は一人残された。
いつもと同じ。また、間違えてしまったみたいだ。
昔からそうだった。他人のありもしない悪意を過剰に読み取って、嫌われる。自分も相手も互いに嫌い合ってると思い込んで自分から閉じこもる。他人のありもしない悪意を勝手に読み取るのは、自分を不幸に追い詰める馬鹿げた行為なのに。
重い溜息を吐いて食器をロボに突っ込んだ。白井に倣い、私も居室へと向かう。清掃ロボが低い駆動音を立てて動き出したのが後ろで聞こえた。
白井に『適切な人間関係を築けていない』と言われたのは甚だ癪であったが、仕方のないことだ。思い返しても、友人らしい人もいない。孤児院育ちだから家族もい

ない。そもそも人間関係の適切な解が何か分からない。解き方をまだ教わってない。私の倫理の中に適切な友人関係の項目はまだ立っていない。

何かで気を紛らわせたかった。感情はどうせ疲れで潰れる。しかし解析は殆ど終盤に差し掛かっていた。パソコンに残りのデータの解析を任せ、先ほど白井にもらったタブレットを眺める。日報には細々とした研究報告がなされていた。

報告書群にはチップがどうやって増殖したのかが書いてあった。脳にいきなり睡眠という情報の断絶を行うことで、エネルギーを持て余させる。それがチップの増殖プログラムを遂行するための燃料として使われる。なるほど、よく考えられたものだ。倫理さえ無視すれば極めて効率的である。

ページを捲っていくと『白井ユキ』という名前が出てきた。

流し見していた目を止め、報告書を読み進めた。彼女の個人情報がつらつらと書かれていた。閲覧に心苦しさはあったが、既に私は一般人から逸脱してしまっている。死者の人権が消滅するとは思えないが、それが生者の知的好奇心を束縛すると思えるほど、私の倫理は強靭にはできていない。

彼女は孤児院生まれ、親は不詳となっていた。今と比べ統制局の権限が肥大していなかったためか、白井家はあまり知られていないようだ。

十五歳。中等教育四年生。模範住民一級。兄は白井ノマエ、統制局警の警部。

模範住民一級は特筆すべきことがない住民に送られる称号だ。

プロフィールの下には彼女の人生すべてが書かれていた。どういう成績でどんな娯楽を好み誰と生殖活動をしたか。その全てが書かれていた。

読めば読むほど思想的にも行動的にも彼女に異常は見られなかった。正しい本を読み、正しい絵を描き、正しい恋をした、ただの少女だった。兄と二人きりで生きているだけだった。

彼女に罪はあったのだろうか。私は生きていて彼女は死んだ。彼女に『運が悪い』以外の死の理由はあったのだろうか。勧善懲悪のような分かりやすいストーリーはあったのだろうか。

頭を振ってその考えを払いのけた。死や生の理由を考えることほどナンセンスなことはない。白井と共に過ごして、久しぶりに人と話して、共感しすぎてしまった。

彼女は死んだ。その事実のみが厳然とそこにあるだけだ。私は私の好奇心に従い、この無覚醒症候群を解明すればよいだけだ。

高い電子音が鳴った。解析が終了したみたいだ。白井ユキの脳の脳細胞の全てを解析し終わった。今回の解析

は脳を細胞一つ分の厚みで輪切りし解析する。時間のかかる解析であるし、白井を説得するのに骨が折れた。それもそうだ。脳をばらばらにするといっているのだから。彼女が彼女だという証左まで手を出すということだから。
議論の末、脳を完全に元通りに繋ぎ合わせることで手打ちとなった。大量の脳サンプルの間に、脳を再結合するナノマシンをセットしながら解析結果を読む。白井ユキの脳はこれまでの人生で何を見てきたのだろうか。

首の後ろが痛み出した。解析結果を読み続けすぎていた。手を止めた。時計を見ると十時間ほどが経過していた。目が痛い。急に空腹がやってきた。背中全てが痛み出す。大きく伸びをすると、背骨の間が順に鳴った。
「終わったか」
背後で声がした。振り返ると白井がこちらを見ていた。
「どうしたんです」
「食事の時間になっても現れなかったのはお前だろう」
確かに、そうか。この空腹の理由はそのせいか。
睡眠が無くなってから、食事を抜くことがより致死性を持つようになった。睡眠という低エネルギー状態が無くなったのだから、そうなるのは予測できていた。餓死率は有意に上昇した。金の無い者が死にやすくなった。
パソコンと機器に囲まれたデスクに、白井は一直線に向かって来た。歩幅を変えて床に散らばった紙を器用に避けている。白井はデスクに皿を二つ置いた。サンドイッチがのっている。これは日々のメニューには無い筈だ。
「私が作った。毒はない」
私の側にサンドイッチの皿を置いた。毒見でもするように一つを白井は食べた。
「皿の交換はどうする」
「必要ないです」
白井は私のデスクに椅子を持ってきてサンドイッチを食べだした。それを見て私も口に運ぶ。あまりの空腹のせいか、食べ物が入ると胃が急に萎んだ。疼痛をもって食事を無視した私に罰を与えてきた。
「解析はどうだ」
「まだ……。いや、解析結果は出ました」
白井はパッとこちらを見た。期待したような目だ。
「ハハッ、そうか。ぜひ、教えてくれないか」
呻きそうだった。統制局のくせに私から無理やり奪おうとしない。なぜか分からない。
白井は私が喋らないのを怪訝に見ていた。
「……統制局内部の情報を渡した時点で信用してほしい」
白井はデスクのタブレットを手に取り、私に渡した。
「日報は第一秘匿情報に設定されていた。統制局上層部でないと閲覧できない。私はこれを奪って来た」
目を見開いて白井を見た。こいつは狂っている。第一秘匿情報なんて、どれだけ厳重に管理されているか。ま

ともな人間ならば、今呼吸をしているのはおかしい。周囲の人々の記憶ごと存在が殺されている。
「いえ、貴方を信用していないわけではない。きっと貴方は私を守ってくれるだろう」
「なら早く教えてくれないか。統制局はネズミのしっぽを掴むのが上手い。お前も私も、いつ殺されるか分からない」
私は言葉を探した。脳さえ輪切りにしなければ、知らなくてもよかったことを知った。
「白井ユキのチップログは見ましたか？」
「……見ていない。私はチップログから情報を取ることができない」
白井は悔しそうに舌打ちをした。
別に白井に教えなくてもいいことだ。傷つくだろうことが簡単に想像できるのにわざわざ言う必要はない。
「おい」
白井が私を睨む。
「青村、私に何か配慮をしないでくれ。私はお前が思うほど弱くはない」
目を伏せた。
「貴方はきっと後悔する」
「ユキが何か隠していたんだろ。何を隠してた」
ため息が出た。言うしかないようだ。
「私は以前、脳にダメージを負った人が無覚醒症候群に罹りやすいと言いましたね」
「あぁ」
「白井ユキも例外ではありませんでした。心理的ストレスがあった。
彼女は親なしと虐められていたようです。かなり酷く」
脳から復元した画像を思い出した。白井ユキが女性だったこと改めてと感じた。彼女も尊厳を抱える一人の人間なのに、壮絶な扱いを受けていた。
教室の隅で、彼女は『幽霊席』に座らされていた。机は撤去され、椅子だけが残され、誰も彼女を見ない。誰かが彼女の制服のスカートの中に『使用済みの生理用品』を大量に詰め込んでいた。彼女は泣きながらトイレでそれを取った。誰も助けなかった。兄に知られたら迷惑になると思ったから、彼女は必死に隠した。
しかしそれが白井には言わない。白井を余計に傷つけたくはない。
「なるほど」
白井は目を伏せ、単調にそう答えた。
「虐めもそうですが、周りに相談できる相手がいなかったことも多いようです。
貴方はずっと忙しく、教師は統制局の人間です。貴方の弱みにならないように必死に隠していて、大脳が委縮するほどストレスを感じていたようです」
「あぁ、なるほど」

白井は片手で目を覆った。
「ユキは、どんなことをされていたんだ」
口を開きかけ、やめた。言ってもいいのか。
「言ってくれ」
強い語気に背を押されるように答える。
「例えば、白井ユキは誰からも見えない人、として扱われていました。あとは貴方が統制局員なので、成績を操作してもらっている、などと心無い噂が流れていました」
白井は細く息を吐く。強い怒りを湛えているのが直ぐに分かった。
白井ユキの身に起きたことを全て言わなくてよかったと思った。噂は成績改竄だけのとどまっていなかった。違法薬、近親相姦、売春、そんなことを言われていたと知ったら、白井はきっと自分を許せないだろうから。噂だけにとどまらず、尊厳を奪うようなことをされていたと知ったら、彼は加害者全員を殺して自分も死ぬなんてことを平然とやるだろうから。
白井にはまだ死んでほしくないと思った。
「虐めは加害者に責任があります」
慰めの言葉が口を吐いて出た。それに私が一番驚いた。白井は私の言葉を笑った。
「慰めなくても大丈夫だ。気にしないでくれ。分かっている。虐めは加害者がすべて悪い。私は私を責めなくてもいい。そういうものだ」
そう言いながら白井は膝をついた。嗚咽が喉から漏れ出ている。
「貴方だけが悪いわけでもない。彼女は貴方を守ろうとした。私なんかより、よほど良い生き方をしている」
白井が顔を上げた。赤い目をしている。
「お前より良い？　当たり前だ。ユキは私の自慢の妹だ」
一瞬、心臓が止まったように感じた。白井に誇ってもらえる白井ユキが羨ましかった。
「そうですか」
自分でも驚くほど、声が平らになった。白井は大きく息を吐いた。立ち上がり、顔を上げる。目の赤みはほとんど消えている。
「すまない、取り乱した。それで、ユキの記憶を読んだだけではないだろう。他の解析は」
白井は淡々と聞いてきた。
「……解析結果ですが、どんな電波がこれに乗せられてきたのかが分かりました。
酷い電波でした。およそ人間の脳に乗せるべきではない強度です。電波それ自体は脳の睡眠抑制と似たものでした。睡眠だけではなく感情、感覚器の抑制をするためのものでしょう。それと強すぎる統制局長の演説映像」
白井は顎に手を添えた。彼にさらに情報を流す。
「興味深いのは、加害や凶暴性に関する感情の抑制がなされていない事です。これが成功したとすれば、感情が

無く統制局長の話を永遠と聞いただけの人間を作れるでしょう」
　白井は私が何を言いたいか察したようだ。
「都市境界での戦闘が絶えないからか。恐れない兵士は有用だからな。機械で代用すればいいものを」
「いえ、機械より人間の方が安上がりです。姿勢統御、指の繊細な動き、燃料の非制限さ、どれをとっても人間を機械めかせる方がはるかに効率的です」
　白井はむっとこちらを見た。
「一般論として、です。戦争において、善悪はもっとも軽視されるものの一つです。……だからこそ、私たちが善悪を見失ってはいけないと思いませんか」
　白井はハッと息を呑んだ。私は会話の解として適切なものを出せたみたいだ。戦争はもちろん悪だと思う。それで終わりだ。社会などどうでもいい。私は私以外を尊重できるほどにまで力を持っていない。
「善悪か……犯罪者のお前がそれを言うか」
「統制局が決めた法に従うことから外れれば犯罪者です。善悪とは関係ない」
　私の言葉に白井はにやりと笑った。共通敵がいる相手とは至極会話がしやすい。
　私の中で白井は敵ではなく、仲良くすべき相手となった。彼とは友好的な関係を築きたいと思った。
「統制局は兵力のために住民の脳を手に入れようとしている」
　私は白井の目を見て首肯した。
「それは、極めて悪であると思う。基本的人権を無視する行為だ」
　私はまた首肯した。眠りを放棄させたあのときから、統制局は人権など無視していると思うが。
「私は、統制局を壊したい。お前はどう思う」
　数瞬、考えた。
　軟禁されている以上、ここで断れば何をされるか分からない。しかしだからと言って統制局に歯向かうまでのやる気も起きなかった。私だって自分の命が惜しい。脳チップがある限り、常に死と隣にあるのだから。
「どう、思う」
　白井は諦めたようにこちらを見た。そんな表情をさせてはいけないと思った。
「知ってしまったのだから、止める義務がある」
　私は存外、絆されやすいのかもしれない。

　止める義務など大層なことを言ったが、この三週間はもっぱら情報収集であった。大まかな計画を立てるのみで詳細に関しては詰め切れていなかった。私の仕事はと言えば白井から頻繁に回されるチップのデータの解析をし続けることだけである。正直重労働であった。データ自体は波形や数値が出てくるだけであり、そこから理由

や意図を読み取るのは私の仕事だ。機械が全てを教えてくれるわけではない。白井はそんなことも知らずに私にデータを投げてきた。扱いが雑になった気がする。
「おい、今日の分の解析は終わったか」
白井の呼びかけに無視を決め込んだ。傍若無人な態度に苛立ち、頭を思い切り掻く。フケが落ちる。最後に風呂に入ったのは三日前だっただろうか。こっちは懸命にやっているというのに、あいつは何だというんだ。
「おい」
白井は私の肩を掴んだ。
「今やってる」
振り返り、白井を睨んだ。いつものいけ好かない顔とは違い、髭が疎らに生えていた。目は焦点が合っておらず虚ろだ。それに気が付き、彼の腕を掴んだ。
「白井、少し休んだ方がいい」
「あぁ」
生返事を返すだけだった。パソコンを持ち込んだのか、私のデスクの隅でキーボードを叩き始めた。
「……早く休め」
「お前が解析してるのに、私が休むわけにはいかない。ドラッグを入れているから、大丈夫だ」
口からため息が零れた。
「どうせ、そこらの粗悪品だろ。私が調整してやる」
「いや、お前の手を止めるわけには……」
白井がごちゃごちゃと何かを言っている。
「いや、シャワーを浴びるついでだ。ドラッグは物理ドラッグだろう？　私が作る電子ドラッグより性能がいいはずがない」
立ち上がりヘッドセットを手に取った。白井を無理やり立たせ、リビングへ向かう。
「基本的にチップは脳の覚醒信号を送っている」
「それは知っている」
白井の足取りはおぼつかなく、ほとんど私にもたれかかる形だった。
「しかしそれだけではない。覚醒機能の合間で脳のストレス物質を排出させる機能も伴っている。物理ドラッグは覚醒機能だけを強くする。だから脳が働きはするが、体に疲労がたまる」
リビングのソファに白井を放った。目ははっきりと開いているが、顔色が悪い。昏倒一歩手前のように見えた。ヘッドセットを被せ白井のチップを解析する。白井は暴れるでもなく、されるがままだった。
パソコンで白井のチップのデータを見る。白井は統制局員だから、セキュリティには既知の脆弱性があった。
「侵入完了」
そう呟いて、パソコンに映る波形を見た。明らかに規律を保った波ではなく、不安定に揺らめいていた。だからドラッグは嫌いなんだ。素人が手を出していい代物で

はない。
　チップに老廃物を排出させる信号を送る。
「白井、起きてるか」
「あぁ、頭が痛い」
　意識はあるようだ。ならばこのまま脳波を安定させるか。
「今から脳波を安定させる。かなり苦しいと思うが、我慢してくれ」
　チップにどんどん信号を流し込んだ。乱したり弱めたりするのは比較的簡単だ。しかし安定させるとなると、繊細な技術が必要になる。睡眠屋を営んでいた私には手慣れたものだが。
　白井が苦しそうに喘ぎだした。私がいながら、物理ドラッグなどに手を出すからだ。大人しく頼ればいいものを、意地になるからいけないのだ。
　しばらくすると、隣から穏やかな寝息が聞こえた。いつものように幻覚を見せたり、ハイにしたりする効果ではなく、極々単純な睡眠だけをもたらした。彼の肉体は休息を必要としている。
　白井が健康を害しているのが許せない。それがどうしてか分からないが。
　画面に映る白井の脳波は、鳥の鳴き声のように一定の周期を保っていた。

　自分の白衣の匂いを改めて嗅ぐと、明らかに臭う。シャワー室に向かう。日々の疲れが服に堆積していたようだ。私も寝なければならないか、と考えて笑ってしまった。薬をここ最近、常に打っているのだから寝れるわけない。
　チップは万能ではない。眠らないだけで休息は必要だ。しかし薬は疲労を無理やり排出させ、活動状態を強制的に維持することが出来た。
「脳へのダメージと肝機能障害さえ何とかなれば……」
　長い廊下にぼやきは消える。
　白衣を洗濯機に突っ込み、その他も洗濯機へ放り投げた。浴室に入ると勝手に温水が流れる。初めて浴びた時は感動で泣きそうだった。水をダバダバ使えるほどに情報局は金払いが良いらしい。
「無睡眠論に肯定していればよかったか」
　そうすれば金がたくさん入ってきただろうか。自分で言っていて笑えた。そんな可能性は毛ほどもないのに。私は私の名にかけ、倫理に反することを是としない。無睡眠論は有害である。これは確実なのだ。
　頭から温水を浴びると、頭痛が酷くなった。胃も重くなる。早く打たねばならない。アレには軽微な鎮痛作用がある。それは痛みの伝達を阻害しているに過ぎないが。
　胃から酸味の強い液体が昇ってくる。風呂に入りすぎたか。吐くのにはまだ慣れない。毎回涙目になってしま

う。
　さっさと上がってデータを解析しよう。きっと、あの白井の驚く顔が見られる。あのいけ好かない顔が歪むところはさぞ、見物だろう。
　脱衣所に戻るとシャワーは勝手に止まった。代わりに自分の周囲を暖かい風が流れた。ため息が漏れた。涙が漏れそうになった。
　なぜか、幼少の頃を思い出す。孤児院は基本的に金がなく、二日に一度、冷水で体を洗うことが入浴だった。
　大学の特待生となり孤児院を出た後はやっと湯で身体を洗えるようになった。しかし、こんなにハイテクなシャワーではなく、数十年物のボタン式であった。同級生は自動シャワーを浴び、栄養価の整った飯を食べていたらしい。
　白井の家が今までで一番安全な場所と思えてならなかった。

　入浴を終え自分の私室に戻る。無造作に椅子に座り、手元にあった注射器を肘の内に刺す。体内に液体が入ってきた不快感と燃えるような熱さが腕に広がる。何度か深呼吸をして熱と痛みを散らす。いくら自分専用に調整済みとはいえ、薬を入れるのは未だに慣れなかった。しかし脳波を弄るより、薬の方が持続と効果が段違いだ。入浴でぼやけていた思考が明瞭になる。

　白井からもらったデータを眺める。数値は私に雄弁に語ってくれる。統制局の意図も大まかには分かってきた。
　当初の仮説通り、統制局は近隣の都市と戦争を始めようとしていた。その為に人々の思考を操り兵士にすることを目的として、秘密裏に実験を行っているようだ。なるほど小賢しい手段を使うものだ。
　私は白井と立てた作戦を思い出した。私がチップを利用し統制局のサーバーを乗っ取る。そして白井が全市民に向けて演説をするという極めて陳腐なものであった。だがしかし、大衆を扇動するのはいつだって、カリスマ性を持った一人と巨悪である。
　共にいくらかの時間を過ごして分かったが、白井は口が上手い方ではない。基本的に何をしているかは事後報告だし、聞かなければ何も言わない。白井は統制局らしく常に秘密主義だった。
　ならば私が市民に向けてプロパガンダを話せばいいのだが、白井は頑としてそれを認めなかった。理由を話さなかったが、私にはわかった。白井は表舞台に私を出そうとはしなかった。プロパガンダを話した方が存在抹消で、幇助は精々人間消去で命まではとられないだろう。
　白井はそんな男だ。極めて利他的な性質を持っていた。誰かのために働こうと、それこそ市民全員を救おうと思っている。統制局の人間だと偏見で彼を見続けてしまった。

彼は私の若い頃にほんの少し似ていた。無睡眠論に反発し、誰かのために働くことを良しとしていた。それだけが生きる意味のように研究をしていた。

おなじく白井も命を投げ打って誰かのために働こうとしていた。私は結局、報われなかった。だから白井は報われてほしかった。白井の行っていることは善で、生きてそれを証明させてやりたかった。

年上の要らない気づかいであることは重々承知していた。しかし、白井に私が出来ることは、これだけだった。

白井のヘッドセットからアラームが鳴っていないということは、彼は快眠中なのだろう。良かった、少なくとも今は彼の体が休息できている。私が調整した電子ドラッグは、単なる覚醒促進ではなく、脳のストレスを軽減し、自然な睡眠に近い状態を誘導するものだ。白井には悪いが、これでしばらく動けなくなるだろう。彼が目を覚ます前に、統制局のサーバーへの逆探知を進めなければならない。

絶え間なくキーボードを叩く。白井から渡された統制局の秘匿情報のデータは、膨大な暗号化の壁に守られている。だが、睡眠統御研究機構にいた頃、統制局のチップ技術を垣間見た経験が役に立った。チップは単なる覚醒装置ではなく、脳の信号を外部から操作する機能を持つ。その脆弱性を突けば、サーバーへのバックドアが開けるはずだ。

画面には、チップログから抽出した異常な電波の波形が表示されている。この電波は、統制局が意図的に流した自己増殖プログラムだ。白井ユキの脳で見つかった触手のような構造は、チップが脳組織を侵食し、外部からの信号で制御される状態を示していた。おそらく、統制局は住民の脳を兵士として最適化するために、このプログラムをテストしていたのだ。戦争の道具として人間を効率化するために。その発想自体が、かつての私が無睡眠論を批判した理由と同じく、人間の尊厳を踏みにじるものだ。

逆探知プログラムを走らせながら、統制局のサーバー構造を推測する。チップの鍵を解析し、通信プロトコルを特定。統制局のシステムは、分散型サーバーを用いて一極集中を避けているが、全てのチップは中央サーバーに定期的にデータを送信する仕組みだ。この送信ルートを逆流すれば、中央サーバーの位置を特定できる。キーボードを叩く速度が上がる。時間がない。白井が目を覚ましたら、彼の利他的な性格がまた邪魔をするかもしれない。彼は私を危険な役回りから遠ざけようとするだろう。そんなことはさせない。私は彼に対し、年長者の責任を果たせていない。

数時間後、画面に赤い警告が点滅した。逆探知が成功し、統制局の中央サーバーの位置が特定された。エイド

ロン都市圏の中心部、統制局本部の地下深くにあるらしい。セキュリティは厳重だが、チップの通信プロトコルを利用すれば、内部からのアクセスを装うことができる。問題は、サーバーに侵入した後だ。白井の計画では、彼が全市民に向けて演説を行い、統制局の非道を暴くというものだった。しかし、彼の口下手さを考えると、計画の成功率は低い。市民を扇動するには、もっと直接的で、感情に訴えるメッセージが必要だ。

ふと、頭に白井ユキのチップに残された映像が浮かんだ。あのサーバールームのような場所、点滅するランプ、無数のコード。そして、モニターの隅でこちらを見つめていた何か。人の心の奥から恐怖を植え付けるようなあのおぞましい映像ならば、人を揺さぶることはできないだろうか。あの映像を市民に公開すれば、統制局の秘密実験の証拠として強烈なインパクトを与えるだろう。

背後で物音がした。振り返ると、白井がドア枠にもたれかかり、こちらを見ていた。顔色はまだ悪いが、目には力が戻っている。

いつの間に起きたんだろうか。アラームは鳴っていたのか。気づかなかった。集中しすぎてしまった。

「お前、何してるんだ」

声は低く、どこか警戒している。ヘッドセットを外したばかりの頭を軽く振って、疲れた顔を浮かべた。

「いや、別に……いや、逆探知だ。統制局のサーバーにアクセスする準備ができた」

白井の目が鋭くなる。彼は一歩踏み出し、私のデスクの画面を覗き込んだ。

「勝手に進めるな。計画は私が決める」

その言葉に、苛立ちが胸を突いた。白井の秘密主義がまた顔を覗かせる。確かに、彼は統制局の内部情報を危険を冒して手に入れた。だが、私だって命を賭けている、賭けようとしている。

「白井、時間が無い。統制局が次の実験を始める前に、サーバーを乗っ取る必要がある。でなきゃ、ユキのような犠牲者が増えるだけだ」

白井の顔が一瞬歪んだ。妹の名前を出したのが効いたらしい。彼は唇を噛み、黙って椅子に腰を下ろした。

「……サーバーに侵入した後、どうするつもりだ」

私は一瞬言葉に詰まった。白井の演説計画には賛同しているが、正直、彼の言葉だけで市民を動かせるとは思えない。統制局の洗脳は根深い。単なる事実の暴露では、人々の心を動かすのは難しい。

「ユキのチップログに残された映像を使う。サーバールームの映像、あれを市民に公開すれば、統制局の秘密実験の証拠になる。あの不気味な存在、いかにも巨悪としてふさわしい」

白井は眉をひそめた。

「アレか」

白井は黙って私の顔を見つめた。その視線には、信頼と疑いが混在しているように見えた。やがて、彼は小さく頷いた。
「分かった。だが、失敗したらお前も私も終わりだ。人間消去じゃ済まない。存在抹消だ」
その言葉に、背筋が冷えた。だが、なぜか笑みが浮かんだ。白井の覚悟が伝わってくる。彼は妹の死を無駄にしたくないのだ。白井の妹がほんの少し、羨ましかった。
「なら、失敗しないようにやろう。白井、サーバーのセキュリティプロトコルの詳細、教えてくれ」
白井は一瞬驚いたような顔をしたが、すぐにタブレットを手に取り、データを送ってきた。統制局の内部構造、セキュリティの脆弱性、そしてサーバーへのアクセスポイント。すべてが詳細に記されている。これだけの情報を彼がどうやって手に入れたのか、考えるだけで恐ろしい。だが、今はそんなことを考えている暇はない。
次の数時間、私たちは黙々と作業を進めた。私はあの映像の配信準備、白井はサーバーへの侵入ルートをさらに精査した。時折、彼がコーヒーを淹れてデスクに置いてくれる。無言の協力が、奇妙な安心感を与えた。かつての私は、誰かと共同作業をしたことなどなかった。孤児院育ちの私は、いつも一人で生きてきた。だが、白井の存在は、まるで初めての仲間のように感じられた。
夜が明ける頃、映像の配信準備が完了した。画面には、白井の妹の脳に刻まれたサーバールームの映像が、鮮明に映し出されている。ノイズ交じりだった映像を細胞単位で構成し直したため、画質がかなり改善されている。無数のコード、点滅するランプ、そしてあの不気味な誰か。未だに直視が出来ない。目から触手のような指が侵入し、脳へ届いて潰される。
「白井、これがあの映像だ」
私は画面を指差した。白井は画面を覗き込み、目を細めた。白井は呆気に取られていた。
「局長……」
鮮明になった動画に向かって白井は呟いた。睨まれたように低く震えていた。彼の目には恐怖と憎しみが混じり合い、普段の冷静さを完全に失っていた。私は思わず画面をちらりと見た。鮮明になった映像の中で、モニターの隅に立つだれかは、確かに人間の輪郭を持っていた。しかし、その姿は統制局の局長だと断定するにはあまりに不気味で、どこか非人間的な雰囲気を漂わせていた。コードとランプに囲まれたサーバールームの中で、その存在はまるでこの都市そのものを支配する亡魂のようだった。
「統制局長か？」
私は白井に確認するように尋ねた。白井は震えながら頷いた。
「間違いない。あの立ち方、肩のライン……統制局の会

議で何度も見た。奴だ。」
　白井は拳を握りしめ、テーブルを叩いた。金属的な音が部屋に響き、私は一瞬たじろいだ。彼の感情の爆発は、心臓に悪い。
「もし局長なら、統制局の陰謀だと断定できる。この映像を市民に流せば、奴らの計画は崩壊する」
　冷静を装いながら、内心では高揚感に震えていた。心が危険を冒す価値があると叫んでいた。この映像が、統制局の非人道的な実験を暴く鍵になる。だが、同時に、こんなものを公開すれば、私たちの命は一瞬で消し飛ぶ想像はたやすくできた。白井は深く息を吐き、目を閉じた。しばらくして、ゆっくりと目を開けると、その中には再び決意の光が宿っていた。
「青村、映像の準備は本当にできてるのか？　一度送信したら、引き返せないぞ」
「問題ない。チップの通信プロトコルを使って、サーバーの認証を突破する予定だ。あとはこの映像を全市民のチップに一斉送信する。しかし、問題は送信後どうなるか。
　市民がどう動くかはわからないし、統制局から逆探知されれば……殺される」
　私は正直にリスクを伝えた。白井は小さく頷き、タブレットを手に取った。
「市民が動くかは、賭けだ。殺されたなら……それが礎となればいいだろう」
　その言葉に、私は何も言えなかった。白井の利他精神は、私のくだらない動機を遥かに超える。私の動機は好奇心と、無睡眠論への反発と、白井がどうか思いを遂げるようにしかない。白井はもっと個人的で、もっと深い痛みを抱えている。
「もう頃合いだ。午後三時は丁度、統制局の公告の時間だ」
　キーボードに手を戻し、送信プログラムの最終確認を始めた。白井はタブレットでセキュリティプロトコルの最後の鍵を入力し、サーバーへのバックドアを開く準備を整えた。部屋には、キーボードの打鍵音と、機械の駆動音だけが響いていた。統制局本部の地下サーバーへの侵入は、想像以上に緊張を強いられる作業だ。
　白井が提供したバックキーの入ったＵＳＢを持つと、一瞬、指先が震えるのを感じた。統制局のエンブレムが刻まれた小さなデバイスは、まるでこの都市全体の重みを凝縮したかのように重い。これが、統制局の中央サーバーへの鍵だ。
　失敗すれば、私も白井も、存在そのものを抹消される。それでも、目の前の画面に映るデータが私の学者としての好奇心と善く生きたいという欲望が否応なく突き動かしていた。
　デスクに置かれた端末のキーボードを叩き、鍵を接続

ポートに差し込む。画面に暗号化された認証画面が現れ、無数のコードが高速で流れていく。統制局のセキュリティは、単なるパスワードや生体認証を超えた複層的な防御システムだ。だが、白井が手に入れたこの鍵は、内部の認証プロトコルを一部無効化する特別なものらしい。

彼がこれをどうやって入手したのか、考えるだけで背筋が寒くなる。統制局の内部でどれほどのリスクを冒したのか、想像もつかない。

「どうだ」

白井の声が背後から低く響いた。彼は私の肩越しに画面を見つめ、いつもより鋭い視線を投げかけていた。無理やり寝かせる前に比べると、元気そうだった。少しほっとした。

「セキュリティの第一層を突破したら、チップの通信プロトコルを偽装して内部アクセスを装う。そして、サーバーから全市民に映像配信をする」

言いながら、内心では心臓の鼓動が速まるのを感じていた。失敗は許されない。一瞬のミスが、白井の命を終わらせる。

キーボードを叩く音が部屋に響く。バックキーの認証コードを入力し、第一層のセキュリティを突破できた。画面に「認証成功」の文字が一瞬浮かび、すぐに次の暗号化層が現れた。統制局のシステムは、まるで生き物のように反応し、侵入者を拒むように新たな壁を構築していく。チップの通信プロトコルを偽装するプログラムを起動し、統制局の内部アクセスを装う信号を送信した。画面には、サーバーのデータ構造が次々と表示され始める。膨大なデータが流れ込み、目が追いつかない。

「プロジェクト一九〇患者リスト……」

私は画面に映るデータを読み上げながら、目を止めた。リストには、数百人もの名前と詳細なプロフィールが並んでいる。年齢、性別、チップの埋め込み日、そして死亡時刻。白井の妹の名前もそこにあった。彼女の死の詳細が、冷たい数字と文字で記されている。心臓が締め付けられるような感覚に襲われたが、それを振り払い、データをスクロールし続けた。

「見ろ」

白井が私の肩を叩き、画面の別のタブを指差した。

「チップの自己増殖プログラムの詳細だ」

画面にはチップが脳組織を侵食するメカニズムが詳細に記述されていた。自己増殖プログラムは、チップが脳の神経回路に触手のように広がり、外部からの信号で脳を完全に制御する仕組みだった。このプログラムが暴走した結果、無覚醒症候群の患者たちは脳が焼き切れるようにして死に至ったのだ。ユキもその犠牲者の一人だった。

合理的だ。白井と共に過ごす前の私なら、そう口に出していたと思う。でも、今ならわかる。それは正しさの

ある一側面に過ぎない。最適解ではない。これを合理だと、理に合うと認めてはいけない。
手を強く握っていた。自分でも驚くほど、苛立っている。
「こんなものを……」
白井の声には、抑えきれない怒りが滲んでいた。彼の拳が震え、強く舌打ちをした。あまりに恐ろしくて、彼から視線を逸らし、画面に集中した。今は、データを読み解き、次の行動を決めることが最優先だ。
さらに読み込むと、『人間兵器化計画』と題されたファイルが現れた。私は息を呑んだ。開くと統制局の最終目的が詳細に記されていた。エイドロン都市圏の住民を、戦争のための『最適化された兵士』に変える計画。チップを通じて感情や感覚を抑制し、統制局の命令だけに従う人間を作り出す。それが、この都市の未来だった。
「クソッ」
白井は歯噛みしていた。知らなかったとはいえ、統制局側の彼も虐殺に加担した側なのだ。優しい彼には酷だろう。
データをバックアップメモリに保存する。これを市民に公開できれば、統制局の支配は崩れるかもしれない。だが、同時に、私たちの命がどれほど危険に晒されるかも理解していた。
「まだだ。こんなものぶっ潰してやる」
白井がタブレットを手に取り、最後の認証コードの入力を始めた。彼の指は微かに震えていたが、目は敵意に満ちていた。私は彼の横顔を見ながら、改めて彼の覚悟に圧倒された。統制局の警官でありながら、それに反旗を翻した人間はどこか狂っている。
「大丈夫か」
「あぁ」
白井は短く答えるだけだった。私は小さく頷いた。信頼するしかない。いや、信頼したかった。かつての私は、誰かを信じるなんて考えもしなかった。孤児院育ちの私は、いつも一人で生きてきた。だが、白井の存在は、私に仲間という言葉の意味を少しずつ教えていた。
白井が最後の認証コードを入力し、画面に「接続完了」の文字が浮かんだ。私は一瞬、息を止めた。成功した。
統制局の中央サーバーに完全に侵入したのだ。画面には、サーバーの全データがアクセス可能な状態で表示されていた。無覚醒症候群の全記録、チップの制御プログラム、そして統制局の戦争計画。すべてが、私たちの手の内にある。
「や、やった！」
私は思わず声を上げた。白井もまた、肩の力を抜き、ほんの一瞬だけ安堵の表情を見せた。だが、その安堵はすぐに消えた。画面に新たな警告が点滅し始めた。
『警告：異常アクセス検知。セキュリティプロトコル再

起動中』
　けたたましいアラームと共に画面が固まる。
「早すぎる！」
　白井が叫び、タブレットを叩いた。私は急いでデータ送信プログラムを起動し、例の映像を準備した。時間がない。統制局の追跡プログラムが私たちの位置を特定する前に、映像を全市民のチップに送信しなければならない。
「急げ！ サーバーがシャットダウンする前に！」
　白井の声に急かされ、私はキーボードを叩き続けた。送信バーがゆっくりと進む。私の額から汗が滴り、キーボードに落ちた。統制局のセキュリティは、私たちの侵入を完全に捕捉しつつある。もうすぐ、追跡プログラムが私たちの位置を特定するだろう。
「白井、市民へのメッセージを追加するぞ！」
　私は咄嗟にマイクをコンピューターに接続した。映像だけでは、市民が状況を理解できないかもしれない。統制局の洗脳は根深く、単なる映像では人々の心を動かすのは難しい。言葉が必要だ。統制局の非道を暴き、市民の怒りを掻き立てるような、強いメッセージを。
「それは俺だ！」
　白井が私の腕を掴み、鋭い声で制止した。彼の目は血走り、疲弊した顔に決意が宿っていた。統制局員としての矜持か、それとも妹の死への執念か、彼は自分が表舞台に立つことで私を守ろうとしているのが明らかだった。だが、私はその手を振り払った。
「時間が無い！　お前じゃ駄目だ！」
　私は叫びながら、ヘッドセットを手に取り、自分の脳チップに接続するケーブルを引っ張り出した。チップへの直接続は手慣れたものだ。自分の脳波をマイクにリンクさせ、声を直接サーバーに流し込む。危険な賭けだ。
　統制局の追跡プログラムが私の脳波を捕捉すれば、即座に抹殺信号が送られるかもしれない。だが、今は考えない。白井が助かればもうどうでも良い。
　そう思ったのは自分でも意外だった。一回り年下な青年を守りたいと思った。法を犯し怠惰に生きていた自分より、遥かに命の価値があると思った。それが私の倫理に一番合う。
「やめろ！」
　白井が私の肩を掴み、引き剥がそうとした。だが、私は彼を振り切り、接続を完了させた。チップに電流が流れ込み、頭の奥で軽い痺れが走る。マイクが私の声を拾い、サーバーを通じて全市民のチップに送信する準備が整った。統制局のセキュリティプロトコルは刻一刻と私たちを締め上げている。
「白井を殺させない」
　私は呟き、マイクに向かって声を張り上げた。チップを通じて、私の感情が言葉に乗る。扇動的な言葉で私は

市民の恐怖と怒りを呼び覚ます必要があった。
「この映像は統制局が君たちの脳を、乗っ取ろうとしている証拠だ。私たちを戦争の道具として、駆り立てるために、こんなに恐ろしいことをなしている。エイドロンの民よ！　これでいいのか？　統制局は君たちの脳を、君たちの魂を、奪おうとしている。彼らは睡眠を奪い、自由を奪う。働け、働けと命じ続けている。都市のために死ねと言い続ける。君たちにも思い当たることはあるだろう。君は君を奪われている。これでいいのか、これでいいのか。否、否！　我々は道具ではない！　我々は人間だ！　今、立ち上がれ！　統制局を打ち倒し、自由を取り戻せ、自由を取り戻せ！」
　マイクを切ると、目の前が真っ暗になった。酸欠か。激しく息をする私の背を白井が撫でた。
　チップを通じて、私の声は市民の頭の中に直接響く。あの映像と私の声は全市民の脳に私の感情ごと刻み込まれる。私の言葉は、都市全てに轟く。白井は私の横で、拳を握りしめ、黙って画面を見つめていた。彼の目には、怒りと、そして悲しみが宿っているように見えた。私は彼に小さく頷き、送信を続けた。
「送信は、終わったか」
　白井が呟いた。だが、その声はすぐに烈しいアラームにかき消された。
「警告：追跡プログラム起動。チップ特定完了」

　画面に赤い文字が点滅し、部屋の照明が一瞬暗転した。統制局が私のチップを完全に捕捉した。時間はもうほとんどない。頭の奥で、チップが微かに震えた気がする。統制局が私の脳波を完全に捕捉した。時間がない。
　だが、あと少しで、私の声とユキのチップログから再構築した映像が、エイドロン都市圏のすべてのチップに刻み込まれる。
「白井、シャットダウンを遅らせろ！」
　私は叫びながら、キーボードを叩き続けた。汗が額から滴り、指先が震える。おそらくチップから伝わる微弱な電流が、頭痛を誘発し、視界が一瞬揺れる。
　市民の心に革命の狼煙を上げなければならない。私は私の矜持のために、これを完了させなければならない。白井のためだけではない。私自身を救うために私は完了しなければならない。
　白井は額に脂汗を掻きながら必死に操作していた。指は汗で滑り、額から滴る汗が画面を濡らしていた。
「もう少し！」
　それは焦りと希望が混じり合った叫びだった。タブレットから、セキュリティプロトコルを一時的に無効化するコードが送り込まれる。送信バーは遅々としているが確実に進む。私は息を止め、画面を睨みつけた。もう少し、もう少しだ。
　一瞬画面が消えた。パッと青い画面が付く。『送信プ

ログラム完了』の文字が浮かんだ。映像と私の演説は、エイドロン都市圏のすべてのチップに刻み込まれた。サーバールームの不気味な映像、統制局長の影、そして私の声、その全てが、市民の脳に直接響き渡った。私はキーボードから手を離し、椅子に背を預けた。全身から力が抜け、胸の奥で安堵と高揚感が混ざり合う。

白井と目を合わせた。彼の顔には、初めて見るような、純粋な笑みが浮かんでいた。

安堵が心を撫でた。白井はこれから、忙しくなる。まだまだ計画は続く。統制局を壊し、人々をチップから解放しなければならない。

刹那、頭蓋骨の奥で何かが炸裂した。いたい、痛い！叫びたくても声が出ない。喉が締め付けられる。息ができない。両手で頭を鷲掴むが、まるで無意味だ。頭の中で何千もの針が突き刺さり、引き裂き、抉り続ける。やめてくれ、誰か、助けて！ 頼む、こんなの耐えられない！ 視界が白く燃え上がり、眩しすぎて何も見えない。

身体が勝手に震え、筋肉が硬直する。体が椅子から滑り落ち、冷たい床に叩きつけられた。衝撃で骨が軋む音がした。遠く、掠れた白井の叫び声が聞こえた。

「青村！　青村！」

頭蓋骨の中で無数の雷が炸裂し、神経が一本一本引きちぎられる。苦しい、苦しい、息ができない！ 胸が締め付けられ、心臓が止まりそうになる。誰かが私の脳を握り潰し、グチャグチャに掻き回している。思考がバラバラに砕け、記憶が、感情が、私自身が溶けていく。このままじゃ私が消える。ただの肉の塊になってしまう。助けて、誰か、こんなのは許されていいはずない！

頭の中で爆音が響き、衝撃が意識を飲み込む。何かが脳髄を焼き、細胞を一つ一つ粉々に粉砕していく。視界が白から赤へ、赤から黒へと染まり、ぐちゃぐちゃに混ざり合う。耳鳴りが頭蓋骨を震わせ、鼓膜が破れる。手足が痙攣し、指先すら動かない。何もできない。何も考えられない。ただ痛みが、苦しみが、存在そのものを押し潰す。身体が跳ねる。唾液が口から溢れ、喉が詰まる。

白井は茫然と、青村を腕に抱えていた。正確には青村だった残骸だ。

統制局のプロトコルが発動し、捕捉された青村は即刻処刑になったのか。冷静にそう考えられる白井がいた。

白井の腕の中で青村の頭は爆ぜた。元から脳が爆弾だったように爆ぜた。白井の頬に青村の右目だったものが張り付いた。肩より上が全て四散したせいか、接着点を失った両腕は床に落ちた。青村の断面から血が噴き出した。血は白井の髪を濡らす。頬に張り付いた眼球が血で

洗い落ちた。体温を保った血と裏腹に、白井は冷え切っていた。

「は？」

どこで間違えた。なぜ青村は死ななければいけなかった。何が駄目だった。最善を尽くしてきた。しかし青村は死んだ。何故。

答えは分かっていた。青村を協力させたからだ。青村を犯罪者として処分していれば生きていられた。つまりは、白井が青村を殺した。最善を尽くしてきたわけではない。結局、白井は『市民のため』と言いながら、青村すら守れなかった。首筋を青村の血が舐めた。

窓の外から、遠くでざわめきが聞こえてきた。街が揺れている。青村の演説と映像が市民のチップに送信された瞬間、エイドロンの空気が変わった。午後三時の統制局の公告は聞こえなかった。町の報道局が速報を流しているらしかった。青村の声が繰り返し響き、サーバールームの映像が電子公告板に映し出された。統制局長の亡魂のような姿が、市民の脳に焼き付いているのだろうか。街角で何かが壊される音が聞こえた。白井は立ち上がり、血に濡れた手を拭った。タブレットには「追跡プログラム起動中：対象消去済み」の警告が点滅している。

生物にとって死は無意味だ、と青村は言った。青村は決定的に分かっていなかった。死は意味そのものから離れた場所にある。死を有意味にするのは残されたものである。青村の死んだ理由にならなければいけない。これを正解にするには、青村が願ったことを成し遂げなければいけない。青村を殺したのだから。

市民のざわめきは、より大きくなっているように聞こえた。白井は青村のデスクに残されたデータを手に取った。チップログの波形、自己増殖プログラムの詳細、『人間兵器化計画』の全貌。すべてがここにある。これを武器に、統制局を倒す。それだけが希望だった。

路地裏の薄暗い通路に足を踏み入れると、湿った空気が頬を撫でた。錆びたパイプから水滴が落ち、遠くで反体制派の囁き声が響く。監視カメラの死角を縫うように進み、白井は廃墟と化した地下の広場にたどり着いた。

そこには、ぼろをまとった数人の男女が待っていた。皆、反体制派として頭からチップを抜き去ったものだ。疎らに神の抜けた頭がそれを証明していた。白井の姿を見るや、彼らの目が鋭く光った。

「白井か」

体格の良い男が低い声で言った。顔には無数の傷跡が刻まれている。統制局の尋問を生き延びた証だ。白井は無言で頷き、青村のデータが入ったメモリを差し出した。

「彼の、データだ。あの演説の肉声も録音されている」

男は白井のメモリを受け取ると、握りしめ、声を震わせた。
「これが、あの……」
広場に集まった者たちが静かに息を呑んだ。青村の名は反体制陣営で知らぬ者はいない。統制局に抗い、市民に真実を届け非業の死を遂げた男。その死は、英雄譚として市民は語り広げた。
「なら、私たちも……」
女が呟いた。彼女の目は、希望と恐怖が交錯している。白井は深く息を吸い答えた。
「あぁ。頼む。革命に協力してくれ」
白井の言葉に、人々は、否、同志たちの目が燃えた。だが、その中には恐怖も混じっていた。統制局の力は圧倒的だ。失敗すれば、全員が存在抹消される。白井自身、いつチップが爆発してもおかしくない。頭の奥で、微かな震えが続く。だが、彼は拳を握りしめた。
「俺たちは、道具じゃない。人間だ」
白井は青村の言葉を繰り返し、同志たちを見回した。
「自由を取り戻せ」
地下街の広場に、静かな決意が満ちた。頷き合い、武器や端末を手に取り始めた。白井は男の持つメモリを一瞥し、サーバーへの次の侵入計画を立て始めた。統制局の追跡プログラムが迫る中、時間は刻一刻と過ぎていく。
女が手を挙げ、口を開いた。
「市民は動いている。街角でドローンが破壊され、統制局の公告板がハッキングされている。次の追跡プログラムが来る前に、準備を整える必要がある」
白井はタブレットを取り出し、青村のデータから抽出したサーバーの構造図を表示した。
「次の侵入は、統制局本部の地下サーバーを直接狙う」
「駄目だ。サーバーを直接狙うのは危険すぎる」
集まった中の一人が、空へ目を向けた。大きなドローンが赤いサーチライトを照らしながら飛んでいる。
一人が、錆びたライフルを手に持ちながら言った。
「武器は揃ってる。だが、人手が足りねえ」
白井は一瞬、目を閉じた。青村の演説が市民の心に火をつけたとはいえ、統制局の監視網は生きている。無秩序な暴動では、革命は失敗に終わる。
「人員なんてどうとでもなる。青村のあのスピーチがあれば。統制局の資金源を抑える方が先だ……」
続けた指令に男が頷き、端末に新たな任務を打ち込み始めた。女は地図を広げ、統制局本部への潜入ルートを提案した。広場には、キーボードの音と低い議論の声が響く。有限の時間は刻一刻と過ぎていく。白井のチップが微かに震え、頭痛が走る。青村が調整してくれたあの眠りからずっと、うまく脳が休まらない気がしている。
だが、それは無視した。暗い地下街の片隅で、白井は革命を計画する。

白井の目には光しか映っていなかった。それはユキや青村が死ぬ間際に見た光のようでどこか違っていた。希望にも似た黎明の光だった。